

北海道と東海の —OBSIDIAN— 黒曜石

2018年
6月30日(土)

9月9日(日)

9:00-17:00

月曜休館 (祝日の場合は翌日)

この夏黒くてスルドイあいつらが、常滑に集結。



写真：北海道紋別郡雄武町

特別講演会

先史時代の狩猟具

—東海地方の石槍文化を中心として—

7/22(日)



講師：白石浩之さん(愛知学院大学文学部歴史学科客員教授)
日時：7月22日(日) 15:00 ~ 16:30
会場：資料館2階 講座室
参加費：無料(予約不要)

旧石器時代から縄文時代の代表的な狩猟具に石槍があります。石槍とは獣を突き刺す槍先として日本のみならず、世界各地で発見されています。今回の特別講演会では東海地方の石槍を通して、当時の社会や暮らし、石器の製作技術など多角的な視点から、新しくわかってきた歴史像を学ぶことができます。

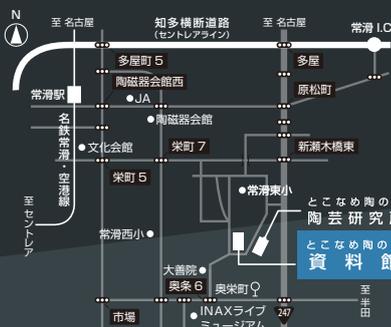
▲ 田原市宮西遺跡の石槍石器群 (提供：田原市教育委員会)

とこなめ陶の森 資料館

常滑市瀬木町4丁目203番地

TEL: 0569-34-5290

www.tokoname-toumori.jp



黒曜石の魅力



▲ 北海道の黒曜石

黒曜石はマグマが急速に冷却された際に生成される天然のガラスです。そのため、火山地帯の日本列島には多くの黒曜石産出地が存在しています。代表的な原産地は北海道白滝、長野県和田峠周辺(和田峠・星ヶ台・男女倉等) 栃木県高原山、東京都神津島、静岡県伊豆・箱根、島根県隠岐島、大分県姫島、佐賀県腰岳などがあります。

黒曜石の切れ味は大変鋭く、加工も容易なため、旧石器時代から石器の材料として広く利用されてきました。縄文時代になると、黒曜石は主に狩りの道具に用いられ、数千年にわたって石鏃の材料として流通しました。また、黒曜石を入手するための流通網は、日本列島に広がっており、ストーンロードとも呼ばれています。

北海道白滝は日本列島で最も産出量が豊富な原産地です。北海道の黒曜石の特徴は漆黒や赤色の混じった黒曜石で、ロシアや本州など広域に流通したことも遺跡の発掘調査で明らかとなっています。

最も美しい黒曜石は、透明度が高く縞の入った和田峠周辺の星ヶ塔系です。この黒曜石は単に刃物としてではなく、宝石的な付加価値を持っていました。例えば、縄文時代に作られた石匙(摘み付きナイフ)は、透明で縞の入った黒曜石を用いて、丁寧な押圧剥離で仕上げられています。また300gと大型の素材からつくられた可能性があります。このことから、良質な材料と高度な技術を結集して作られたと考えられ、貴重な威信材として流通したと考えられます。その根拠として、星ヶ塔系の黒曜石は、原産地から600キロ以上も離れた遺跡からも見つかっています。



▲ 日本列島の主な黒曜石の原産地



『雄武町百年史』より

もんべつぐんおうむちょう
北海道紋別郡雄武町



OBSIDIAN OF HOKKAIDO
北海道

佐藤昭弘氏の研究

展示の主体を占める北海道の石器は北海道紋別郡雄武町に在住する佐藤昭弘氏が長年採集した石器をお借りしました。佐藤氏が考古学に関心を抱いたのは小学生の頃で、自宅の周辺や学校の登下校時に石器を採集したことから始まります。中学校の夏休みの宿題（自由研究）は石器の保管箱の製作で、採集した石器を収納して提出するほど熱の入るものでした。

佐藤氏の考古学研究は発掘調査ではなく、いわゆる分布調査と呼ばれる石器の採集活動をおこなってきました。北海道には牧場、農場が広がっており、土を大きく耕す「^{てんちがえ}天地返し」が定期的におこなわれます。その際に地表に顔を出した石器を拾い上げ、何時、何処で発見したのかを詳細に記録を残していくことで、遺跡の分布範囲や時代を調べることができます。

こうした丁寧な研究活動によって、佐藤氏は 50 以上の遺跡を新たに発見しました。その業績は大きく、情熱を持った地域の研究者によって遺跡が守られ、文化財の保護と地域の魅力を発見するきっかけになっています。



天地返しの様子



天地返しで発見された石器

北海道雄武町採集の石器

佐藤氏が採集した石器は主に道東地域で、地元の雄武町を中心に隣接する市町や白滝周辺なども含まれています。それを踏まえて、今回の展示では雄武町で採集された石器を軸にしながら、遠軽町周辺の石器も展示しました。

佐藤氏が採集された石器の種類は**台形石器**、**石槍**、**石鏃**、**スクレイパー**、**石匙**などがありますが、これらの多くは縄文時代に相当する石器が中心です。

台形石器は斜めに大きな刃部をもつナイフ形石器で、**恵庭**の火山灰よりも下層から出土することが知られています。このことから2万年以上前に作られたものと考えられ、雄武町では最古級の石器と考えられます。石槍は槍の穂先に装着してクマやエゾシカなどを捕らえる道具です。また石槍の中にはトドやアザラシなどの海獣も対象になっていたと考えられます。雄武町の遺跡では10 cm前後ですが、北海道全域でみると20 cmを超す大型のものも見つかっています。石鏃はウサギやトリなどの俊敏な小型動物を捕らえるのに適した弓矢の矢の先端に付けられたものです。スクレイパーは木・角・骨を削る、動物の毛皮を鞣すといった様々な機能を持つ加工具です。石匙はスクレイパーと同様な機能を持っていると考えられますが、紐を掛けて首や腰にぶら下げするのに適した**つまみ**を持つのが特徴です。



だいけいせつき
◀ 台形石器



いし やり
石 槍



せき そく
石 鏃

▼ スクレイパー



いし さじ
石 匙



いし きり
石 錐

(全て雄武町内出土)



▲ 田原市保美貝塚の貝層



黒曜石の露頭 (長野県霧ヶ峰)

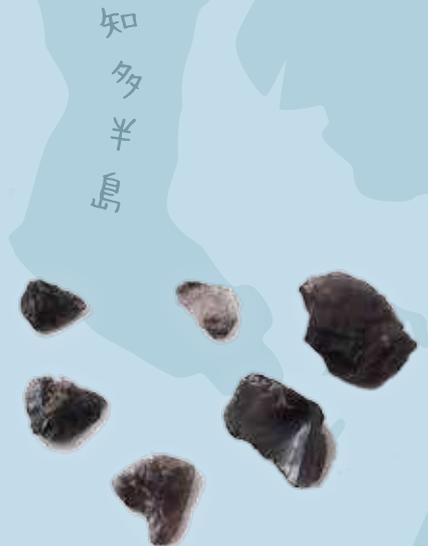
OBSIDIAN OF TOKAI
東海



くすばさま
楠廻間貝塚出土の石匙



知多市内の縄文時代早期の石鏃



いしぜ
石瀬貝塚出土の黒曜石

知多半島と渥美半島の黒曜石

知多半島や渥美半島には黒曜石が産出しませんが、ストーンロードによって黒曜石がもたらされます。知多半島はその多くが長野県和田峠周辺で産出したものが運ばれてきました。しかし、渥美半島は隣の半島にも関わらず多様な産地が見つっています。渥美半島で発見されている黒曜石の原産地分析を行った結果、長野県和田峠周辺の諏訪エリアを中心に、東京都神津島や静岡県伊豆半島の天城柏峠、神奈川県あまぎかしわとうげの箱根畑宿など多様なルートで運ばれてきたことがわかりました。

知多半島では縄文時代早期後半の知多市楠廻間貝塚や二股貝塚から黒曜石製の石鏃がみつっています。当時の知多半島で見つっている石鏃の石材は地元のチャートが中心で、その他に近畿地方のサヌカイトや岐阜の下呂石などがあります。黒曜石の割合は出土石器全体の1%程度で貴重な石材であったことがわかります。縄文時代中期になると、常滑市石瀬貝塚で黒曜石の石核と共に石鏃が出土しています。黒曜石の石核は石器の素材を作る最初の母岩となるもので、時代によって黒曜石の流通に変化があったことを示す重要な資料と考えられます。

チャート：堆積岩で、とても硬くて切れ味の鋭い石。 **サヌカイト**：安山岩の一種で、近畿地方ではポピュラーな石。

下呂石：安山岩の一種で、下呂温泉の近くに岐阜県湯ヶ峰で産出する石。



みやにし
宮西遺跡出土の石槍



宮西遺跡出土のスクレイパー



渥美半島



がんごう
雁合遺跡出土の石鋏



ちょうしろ
長代遺跡出土のナイフ形石器



ばんき
田原市内の縄文時代晩期の石鋏

渥美半島でも知多半島と同様に黒曜石が貴重であったことに変わりはありませんが、石器に使われた主となる石材が大きく異なります。縄文時代草創期の宮西遺跡では、有舌尖頭器ゆうぜつせんとうきと呼ばれるこの時代特有の狩猟具が見つっています。宮西遺跡はチャートを中心に熔結凝灰岩や頁岩などの白色に風化する石材が用いられています。北海道では黒曜石でスクレイパーがつくられていますが、渥美半島では白色の石材が多く用いられるなど地域の違いを見ることができます。

黒曜石が使われはじめる縄文時代早期になると、白色に風化する石材が減少し、サヌカイトや下呂石ろいしの割合が増えていきます。黒曜石は少量ですが、長野県産とともに関東方面からも流通した時代で、縄文人のダイナミックな活動が想像されます。渥美半島で黒曜石が増え始めるのは縄文時代後期から晩期の頃で吉胡よしご・伊川津いかわづ・保美ほびの三大貝塚が形成された頃です。黒曜石は長野県産が主要となり、知多半島と同様にシカやイノシシ、トリなどの獲物を捕らえる石鋏がつけられました。